



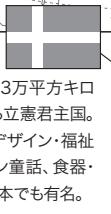
Letter from Copenhagen

コペンハーゲン通信 10 PartII

デンマーク工科大学のロボット研究室。「遊び」や「楽しい」という感覚をキーワードにした研究に特徴があります。写真は、叩く、踏むなど物理的的刺激に応じて発光するパネル。単調なリハビリにゲーム感覚で取り組める、といった使い方が期待されています。

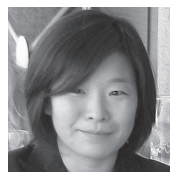
デンマーク王国 DATA

人口551万人(≒北海道)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。



当会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度が高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。

デンマークの “Made in Japan”



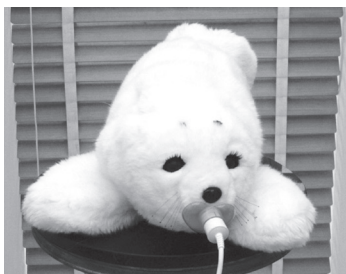
樋口 麻紀子
在デンマーク日本大使館一等書記官
(経済同友会事務局より出向中)

「デンマークは対日貿易黒字を計上する数少ない国の一つであり、貿易品目が相互補完的なため、良好な貿易関係が維持されています」——。「日・デンマーク二国間関係」につき、こうした説明から始めることが多いのですが、今回はデンマークの成熟した福祉制度と、高い技術に支えられた「日本製」が相互補完関係を生み出している新しい例を紹介したいと思います。

この数年来、日本のロボット技術の進展は目覚ましいものがありますが、デンマークはそうした先進技術の社会福祉分野への導入に積極的です。

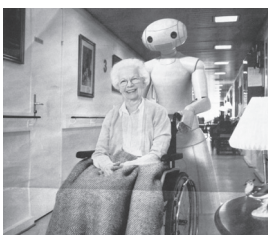
国家予算の50%を占める医療・社会福祉セクターを抱えるデンマークにとって、少子・高齢化への対応は福祉国家の将来を賭けた死活問題です。また昨今、高齢者・障害者に対するケアは、「必要な支援を得ながら、できるだけ長く自宅で生活できるようにする」ことを基本方針に、施設拠点から在宅ケアへと比重を移しており、個人向けにカスタマイズされた質の高いケアを求める傾向が高まっています。

そのため、例えば加齢により家事負担に耐えられなく



◀「癒しロボット」のパロ。コペンハーゲンでは認知症患者のケアに活用されています。大使公邸での展示に際しては、開発者がこだわったという毛皮の触り心地やおしゃぶり型の充電器など、細やかな工夫に皆が釘付けになりました。

▶大手労働組合は6月、政府の財政再建策を受けて、「福祉予算がカットされるっていいの？」と呼びかける新聞広告を出しました。福祉・医療分野への新技術導入は自治体単位で広がっていますが、必ずしも賛成意見ばかりではないということでしょうか。



なった人には掃除ロボットなどその部分のサポートを、車いすを使う人には自由に自宅を動き回れるようリモコンで動くドア・システムを、認知症を抱える人には日常の記憶・記録の管理を助けるシステムを、と個々人が自力で生活するために真に必要なとされる支援のみ行政が手当てを行うという発想です。

より少ない人数・低コストでより質の高い多様なケアを求められるデンマークにとって、「ロボットやICTなど新技術の導入」という解決法は必然的だったのでしょうか。

これまでにも、コペンハーゲン市が認知症患者ケアのため、アザラシ型癒しロボットの「パロ」を購入、同年オーデンセ市がロボットスーツ「HAL」の実証実験を受け入れるなど、実用に近いところで日・デンマークのコラボレーションが進んでいます。デンマーク技術研究所も、福祉・ヘルスケア分野での応用が期待される日本企業の製品の受け入れ、大学との共同研究を行っています。

今年6月、デンマーク経済紙は「福祉産業育成の必要性」と題する論説を掲載しました。これが示唆したように、自らの問題解決のために技術を導入することにとどまらず、福祉に関する先進的な取り組みを集積し、産業クラスターとして自国を成長させていく戦略があるのでしょうか。日本の新成長戦略と同じ方向性を持ちつつ、自治体主導で具体的な取り組みが生まれているところに、デンマークらしさがあると思います。

ある大学のロボット技術研究室を訪問した際、開発中の自動採血ロボットの試作品を見せていただきました。その先生曰く「採血のようなルーティン・ワークはできるだけ自動化する。看護師・介護士は空いた時間を患者と接するために使える。人が人でなければできない仕事をするために技術を使うのがあるべき姿」とのこと。ロボット技術にかかわる人すべてが同じ考えとは言えませんが、成熟した福祉制度を持つ国ならではの哲学を垣間見た気がしました。